



TITLE:

<批評・紹介> 異國物語 (附校讀記)

AUTHOR(S):

三田村, 泰助

CITATION:

三田村, 泰助. <批評・紹介> 異國物語 (附校讀記). 東洋史研究 1936, 1(4): 382-384

ISSUE DATE:

1936-04-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138688>

RIGHT:

異國物語

附校讀記

昭和十年十二月二十五日。三秀舎發行。菊版和裝幀入
校讀記五四頁。非賣品。

今から凡そ三百年前、徳川將軍治世の寛永二十一年AD
一六四四年といふ年に越前の三國村新保の漁民が五十八
人三艘餘の船に乗つて蝦夷松前に行く途中、暴風雨に遭
ひ、吹流されて今の間島附近に漂着した。其處で人蔘の
盗掘者と間違へられて四十餘人慘殺され、殘餘は奉天を
經て北京に連れて行かれ、それより清廷の計ひで朝鮮を

經て對島に送還され、無事日本に歸り着いた事件があつた。その時の見聞記がこの異國物語或は韃靼漂流記又は韃靼物語と謂はれる書である。丁度彼等が北京に行つた歳は清朝が入關して北京に都を奠めた順治元年に當り、圖らずも彼等は明清鼎革といふ支那史上の大事事件に遭遇したのである。然し單なる漂流民に過ぎない彼等には支那に關する知識がある筈もなく、従つてこの政治的推移には何等關知する處なかつた様子であるが、その代り一年餘の滯燕中彼等の素朴な目に映じた滿洲人の内部生活が極めて率直に印象的に語られて居る。滿洲人の平常を宛も裏長屋の隣人を語る調子に、その言語、服裝、食物義理人情等その機微に觸れて説いてある。讀んで甚だ面白い書物である。

それで當時から世の好事家の眼を惹いたものらしく、例へば寛延年間に出た五冊本の朝鮮物語には巧みにこの話が織込まれて當時のエクゾチシズムを満足せしめたものらしい。然し之を學問的に取上げたのは近藤正齋で、邊要分界圖考にその大略を載せその註に「以上韃靼漂流之紀事モトヨリ漂人ノ語ニシテ深ク信スルニ足ラス又筆記スル者之文飾モアルヘシ然レトモ本邦ニテ韃國ノ事ヲ

記シ且其事唐山ノ書ト符合スルモノ有ルヲ以テ其略ヲ茲ニ載ス」と記して大方の注意を喚起した。次いで内藤先生は叡山講演會にて此の書の内容を學問的に紹介批評され、殊に珍奇な滿洲語を傳へて居る事を示されたので、遂に學界に喧傳されるに至つた。石井研堂氏刊の帝國文庫漂流奇談全集にこの漂流記が收められてあるが、内藤先生は石井本の他に尙異本の存する事を紹介された。今恭仁山莊藏赤城堂叢書中にある韃靼物語が夫である。近藤正齋の據つたのは恭仁山莊藏本と同じものらしく、之に依つて見ると正齋の時代には已に漂流記の異本が存した事が分る。處でこの漂流人の中の竹内藤右衛門といふ人の子孫である。竹内家にも現に一本傳つてゐて、此度刊行された異國物語はこの竹内本を影印したものである。この三書とも内容を異にする處多く題も異つて居るが三書相合して一をなす事勿論である。

内藤先生は餘程この書に興味を持たれたらしく、是に關する史料を廣く獵られ、竹内家の墓碑過去帳、建仁寺藏の日韓書契等を初としてその採取は朝鮮に迄及んで、適々朝鮮に出張された今西博士にも調査を依頼されたものと見え、同博士から先生宛の手翰があつて内藤家の好

意に依り披見させて頂いたが之に依ると「龍義去る十日京都出發風浪の爲め十二日夕刻京城に到着いたし候十五日參事官分室にて御下命の史料調査致し候仁祖王實錄典客司日記承政院日記より披萃いたし候有益なるものは見當り不申遺憾に存じ候小田事務官の好意にて參事官室在勤の朝鮮人に寫さしめ參事官室より先生に贈呈さるゝ由云々」(原文の儘)とあり、先生の求められた史料が何であつたか分る。餘事であるが、此の手翰は大正三年九月二十日付のもので謂はゞ歴史的のものとして私達には誠に興味深いものである。處で文中にある書名は皆舊奎章閣の秘籍で近年に至つても容易に披見を許されなかつたものであるし、又之等が韃靼關係史料である事は誰も氣が附かなかつたものである。爾來之等の史料は二十年餘先生の篋底深く藏されて「滿洲交通略説」以後の先生の御意見は遂に文字にならなかつた。

奉天の園田一龜氏は専門にこの漂流記を研究され、奉天圖書館叢刊第二冊に「韃靼漂流記研究」を執筆された。之は石井本を使用したがその後李朝實錄が景印されるに及んで「再び韃靼漂流記に就いて」をものされた。然し右に述べた如き異本史料があつてはその研究は充分とは

謂へない。

今度の影印竹内本異國物語の刊行には、北平の橋川時雄氏が當られ、この本の附録に校讀記なるものを附された。氏は昨年親しく恭仁莊所藏の異本、史料を精密に餘す事なく調査され、その結果は校讀記に結集されて、その異本の校定注釋は凡そ韃靼漂流記研究の集大成といへるものである。この校讀記には研究は略されて別著「異國物語考譯」にその意見が陳べられ支那雜誌「正風」に漢譯して掲載されてある。之は未完でその全部を窺ひ得ないのは遺憾であるが讀者は併讀されたい。

以上漫然と興味の儘に書きつらねたが、この漂流記と略同時代にマルチンマルチニが韃靼戰記をものした。マルチニは福音を傳へる有識の宣教師であつたからその著は漂流記の素朴さに比すべきもなく立派な文學的作品である。然し傳道が目的である故に見方が偏して居て漂流記とよき對稱を示して居る。瀋陽狀啓その他に見られる朝鮮人の手記と共に之等外國人が各々明清鼎革の實況を傳へて居る事は奇縁といふべく、この三者を比較する時は各々見方の立場が異りその間に民族的個性とか氣質が自ら顯はれて興趣盡きないものがある。(三田村泰助)